



リズムに合わせて身体で覚える単語の発音

に立つというゲームだ。「椅子取りゲーム」の要領である。日本語の色のことを学ぶのだが、生徒たちはそれぞれの母語も使っている。「誰か言いたい人いますか?」という先生の問いかけに、子どもの一人がカードの色を言う。その後交替しながら四人くらいが同じように色をこゝとばで表す。日本語の授業なのだが、母語で言っても大丈夫。自分の身体でリズムを刻み、母語を使いながら日本語になじんでいく。それがムンドのこゝとの教育。母語という鏡と日本語という窓で世界を知る。

母語と日本語を関連づける
3年生の男の子と女の子に、卒業生のカイヤ・ラファエル先生が、漢字を教える授業。プロジェクトで山川、人、木、田、日、月が描かれた風景の絵を投影しながら授業開始。それぞれの絵の上に山、川、人、木、田、日、月という漢字を重ねて投影される。その後、これらの漢字だけのカードを一つひとつ提示して、子どもたちはポルトガル語でそれが何かを答える。カードをシャッフルしながらこの学習が続く。少なくとも答える時には二人の母語なので答えやすい。それぞれの漢字の意味を理解できたら、それを母語で表現させるのだが、もしも日本語で答えさせることにしていたら二人はこれらの漢字について完全に答えることができないかもしれない。しかし母語でなら、山、川、人、木、田、日、月にあたるこゝとばを3年生なら既に知っている。

授業で子どもたちに提示されたカードのなかに「休」という字も混じっていた。投影された絵とその上に重ねられた漢字を使いながら、その意味を考えさせる。「人」と「木」の合成されたものが「休」という字になることを、先生とのやりとりでこの子どもたちは捉えた。「木に人がもたれかかる」様子を表すのだということも子どもと先生が絵を使いながら話していた。この子どもたちの母語であるポルトガル語で、



小学校3年生の母語による漢字学習(カイヤ・ラファエル先生)



である。

その次は少し難しい問いだ。「日」と「月」と「日」を組み合わせると「明日」になるが、それがどついつの意味かを子どもたちに推測させている。「日」が出てそれが沈んで「月」が出てくる。その「月」も沈むと再び「日」が出てくる。

第56回「博報賞」受賞

(日本語教育領域)

静岡県 学校法人 ムンド・デ・アレグリア学校

母語教育で「豊かな心」と「考える力」を、 日本語教育で「生きる力」を

山元 隆春 広島大学 名誉教授

高い空の下、「歓びの世界」が広がる

1月29日は風が強くて寒い日だった。ムンド・デ・アレグリア学校の岡則子先生の車で、博報堂教育財団の中馬淳さん、秋田佳子さん、同子ども研究所の福岡由美さん、田口由美子さんと一緒に、浜名湖沿いの高い空を眺めながらその学校に向かった。

学校法人ムンド・デ・アレグリア学校。「ムンド・デ・アレグリア」はスペイン語で「歓びの世界」。母語を基盤にした日本語教育を早くから進めてきた学校だ。

母語で言っても大丈夫!

教室の窓の外には桜の木が並ぶ運動場が見える。日本語教師であり音楽家でもある先生が日本語を教える小学校4年生の授業(小松直美先生担当)。「となりのトトロ」の「さんぽ」のメロディーに合わせて、いずれも学校のジャージに身を包んだ八名の生徒たちが床に並べられた青・緑・黄・赤の十二枚の丸いカードの上を飛び跳ねていた。「カレンダー」を読む。これもピアノに合わせて「日月火水木金土」と歌う。それから日にちの数え方。その後、月の読み方。12月7日(じゅう)にがつなのか、1月10日(いちがつ)とうかなどと音読みと訓読みが混じる。数詞の難しいところをちゃんと読んでいる。そして「今日は何日? 何曜日?」という問いかけに「1月29日、木曜



小学校4年生の日本語授業の様子(小松直美先生)

日」と答えていた。「天気は?」「晴れ」「寒いね」というやりとりが続く。そして、時刻の読み方。少し距離を置いて並び、手の動きで時刻を表すアクティビティ。

その次は写真を見ながら手拍子して「こうえん」「がっこう」「コンビニ」「スーパー」「くう(空港)」「びゅういん」「えき」と、音便や長音の含まれた単語を発音する。生徒たちの母語にはなじみのない音を、手拍子で拍をとりながら身体で覚えている。

「今度は色ね」と先生。再び青・緑・黄・赤のカードが登場する。ピアノに合わせて踊りながら、音が止まったら、先生の言う色のカードの上

ということを絵を使いながら先生は説明する。今日の時間が過ぎるやいなや「さあ、今日の話は『明日』はそれを表すといつうに『言』と『子』もたは日本語の『明日』に相当するポルトガル語で答えた。時間意識の伴った抽象的な思考が必要になるはずだが、ポルトガル語という母語で考えることができるのだから、子どもたちは『明日』を見事に理解していた。

これは、未知の事柄を理解しようとする時に既知の事柄(既知知識)を使うという方略だ。この授業の子どもたちも「山」「休」「明日」という彼らにとって未知の文字を理解するために、母語のポルトガル語でわかることを手がかりに漢字の意味を理解していた。関連づけるといって理解するための方法を駆使していたことになる。ムンドのことは教育は、子どものためのスキーマ(既知知識のネットワーク)を活性化。頭のなかの母語の辞書を駆使するから「そ、対象の深い理解に至る。考えさせているのだ。それは、一人ひとりの子どもがもっている潜在的な力を引



イラストを使用した子どもたちのためのひらがな表

き出す学習指導でもある。「引き出す」は「教育(education)」の原義。子どもたちが親から引き継いだ母語が活かされている。

子どもに「一つの言語」をしっかりと育む

昨年亡くなった佐々涼子さん(感動的なルポルターージュ紙つなげ)で東日本大震災後の東北を描いた『夜明けを待つ』(集英社インターナショナル、2023年)にムンドのことが出てくる。そこに校長の松本雅美先生のことばが引かれている。

「言葉なんて、一つの言語がしっかりと育てれば、後からいくらでも学習できる。何よりもまず、人間の基礎として親と言葉が交わることが必要だと思いました。子どもたちは今後、ペルーで就職するのか、日本で暮らすのかかわりません。そうであるならば、まずは親の国の言葉をしっかりと習得すべきなんです」(佐々涼子『夜明けを待つ』153ページ)

松本先生のこの考え方が小松先生の授業にもラファエル先生の授業にもしっかりと活かされていた。すべてのことは教育の中心となる重要な思想でもあると言っている。わたしは専門の国語教育(母語教育)を行う理由を示すものでもある。「人間の基礎として親とことばが交わること」は国語教育(母語教育)の基本。そして松本先生のこの覚悟は国語教育に携わる

本の学校ではね、椅子を温めているだけだ」ということばは松本先生の心にずっと残る。それまでわたくしたちの質問に淀むことなく語っておられた松本先生が、この二つのことばの後だけは、しばらく沈黙した。

「もう一つ…」と前置きして語り始めたこの出来事こそ松本先生の人生の最も大切な転換点であった。こんな思いを一度と子どもにさせたくない。だから松本先生は「一つの言語を子どもがなかにしっかりと育てることをことばの教育の中核に置くこと、それが子どもの人生の根になると考える。異郷で未知のことばを学ぶということがその子にとっての『ダブルアドバンテージ』になるようにと。沈黙なされたのは、その男の子のことばを痛みとして幾たびも心のうちで反すうしてこられたからだと思っただけでいいよ。これにつかまって浮いていると、それでしかないです。でも、そこからまた私たちはフォロワーしていく。つかまっていくと言いつつ、いろいろな用意をするのよ。」

松本先生の話はムンドの生徒たちばかりでな

く、ことばの学びにつまずきを覚えている子どもたちやその子たちを受け持つ先生たちへの大切なメッセージと励ましにもなっていると考える。既知のことばを使って考えることで、未知のことばの意味を手に入れていくことが、どれほどその子にとっての世界を広いものにしていくのかということもムンドの取り組みは教えてくれる。年少の学習者ほどこのような取り組みが必要であるということも。

帰り際、ムンドの生徒たちが和太鼓の演奏を披露してくれた。最近あまり練習をしていないということだったが、見事な演奏であった。生徒たちの「親の国」で受け継がれてきたリズムが和太鼓を伝えてきた文化とミックスされて、身と心に心地よく響く。松本先生が願いつくり上げた「飲びの世界」の象徴として、子どもたちの刻むリズムに一心に聴き入っているわたくしであった。



和太鼓の演奏を披露する生徒たち

者がもたなければいけないものでもある。二つの授業を参観した後、松本先生の話聞いた。一時間を超えるインタビューのなかで松本先生のことばの教育の履歴と思想が豊かな表現で語られたのだが、その終盤で「もう一つ先生にお伝えしたいことがあります」と前置きして語ってくれた話がある。



左から松本雅美校長、筆者

「博報賞」は、児童教育現場の活性化と支援を目的として、財団設立とともにつくりられました。「ことばの力を育むことで、子どもたちの成長に寄与したい」そんな思いを核に、日々教育現場で尽力されている学校・団体・教育実践者の「波及効果が期待できる革新的な活動と貢献」を顕彰しています。また、その成果の共有、地道な活動の継続と拡大の支援も行っています。

「博報賞」について

活動領域

- 国語教育 ●日本語教育 ●特別支援教育
- 日本文化・ふるさと共創教育
- 国際文化・多文化共生教育 など

第57回「博報賞」応募受付期間

2026年4月1日(水)～6月25日(木) ※財団必着
正賞：賞状
副賞：博報賞100万円 功労賞50万円 奨励賞30万円
後援：文部科学省

博報賞問合せ先:hakuhoushou@hakuodo.co.jp

公益財団法人 博報堂教育財団

第57回の詳細については、博報堂教育財団ホームページをご覧ください。



〒100-0011 東京都千代田区内幸町2丁目2-3 日比谷国際ビル14階 TEL(代表):03-6206-6266(平日9:30~17:30)